

発表題目：

ネパールにおける先住民族の社会運動と衝突抑止：「牛」にまつわる対立を事例に

所属：京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科

氏名：荒木彩陽

1200 字程度で発表内容を記載してください。

ネパールは、2007 年暫定憲法によって「ヒンドゥー王国」から「世俗的国家」へと変革を遂げた。これにより、ネパールでは人々が自由に信仰を実践し、マイノリティの人々が自らの権利を主張しアイデンティティを表出するための法的前提が整った。このような制度変革とともに、ヒンドゥー王国の再建を目指すヒンドゥー・ナショナリスト団体による運動や、ジャナジャーティーと呼ばれる先住民族たちによるナショナリズム運動が勢いを増してきた。ヒンドゥー・ナショナリスト団体は、政治家と対話することや定期的に集会を開くことなど、非暴力的手法に基づいた活動を行っている穏健派の団体がほとんどであるが、教会やモスクを爆破し人間の身体にも危害を加えるような暴力を行使する者もいる。ジャナジャーティー団体にも同じように、独自の宗教を有する集団だということを明示するために、ヒンドゥーの実践をボイコットする非暴力的な運動を行う一方で、デモの際には（警察が催涙弾や威嚇射撃を行ったことに対して）投石を行い、政府関係の看板などを燃やすなど、物理的な暴力の行使も見られる。上記のような復古的ナショナリズムや対抗的ナショナリズム運動の特徴や背景などを分析する先行研究は存在するが、暴力自体に焦点を当てたものではない。そこで発表者は、これらの運動に参加する当事者の語りと、日々のナショナリズム運動の実践への参与観察の結果をもとに、暴力発動の要因と暴力を抑止する要因の双方を探究している。

本発表では、具体的な事例として、2023 年に生じた「牛」にまつわる先住民族による社会運動における、ヒンドゥー・ナショナリストと、ライヤリンブーを中心とした先住民族との対立を取り上げる。先住民族の儀礼の中には牛肉や牛の頭部を捧げる儀礼が存在している。しかしヒンドゥーがマジョリティを占めるネパールにおいて、牛を殺すことは刑法で禁止されている。つまり、それらの先住民族の視点からは、信仰の自由が完全には実現していない。そのような状況下で、先住民集団が社会運動の一環として、あえて牛を殺し、その肉を食べる、ということが、抗議レパートリー（repertoire of contention）の一つとなっている。この事例は主要な宗教シンボルをめぐる対立であるにもかかわらず、物理的暴力を伴う衝突にはいたっていない。つまり、それぞれの宗教集団が自らを他から区別する差異を前景化しつつも、暴力によって他者を排除することなく存在するという状態にある。

本発表では 2023 年と 2024 年に合計約 6 ヶ月間、首都カトマンズとネパール東部の各地で実施した臨地調査にもとづき、ヒンドゥー・ナショナリストと先住民族運動家たちの間の対立点（points of contention）を明らかにし、その対立が暴力化を招きうる要因や、対立の激化を抑止し暴力の発動の回避に貢献していると思われる要因について考察する。